

みじん子賞を受賞して

「ふるさとを愛し地域で輝く子どもの育成」～飯野校区を元気に～

益城町立飯野小学校 校長 柴田 敏 博

1. はじめに

この度は、荣誉ある「みじん子賞」を頂き心から感謝申し上げたい。

今回の受賞は、これまでの地域の人々や本校職員・児童が長年にわたり環境学習に取り組んできた成果であり、熊本地震により大きな被害を受けた私たちにとって今後の環境学習を推進する励みとなるものであった。

2. 本校の環境学習の歩み

本校は、益城町の南部に位置する。北部には水田地帯、南部には山地が広がっている。その中心を、岩戸川が南から北へ流れている。北東には阿蘇の伏流水が湧き出す「そうめん滝」があり、そこから江戸時代に先人の努力によって築かれた「砥川用水」が、西へ流れている。

これまで、本校の地域学習は、飯野地区の優れた「自然」「伝統」「文化」を基盤として行われてきた。

地域学習の中では、①「地域を元気にする活動」②「地域の優れた自然・伝統・文化を基盤とした活動」③「地域の人材との交流」を視点として、「ふるさとを愛し、地域で輝く子どもの育成」を目指して進められてきた。

それらの中核をなすのが、今回受賞した環境学習の取り組みである。「岩戸川」や「そうめん滝」、「砥川用水」を利用し、水と緑を生かした環境教育が進められてきた。

1・2年生では「飯野の自然に親しむ活動」、3年生では「岩戸川の生きもの探検隊」、4年生では「岩戸川のホタル探検隊」・「砥川用水と富田茂七」、5年生では「水田の不思議を発見しよう」、6年生では「飯野のすばらしさを発見しよう」と全学年で計画的に活動を進めてきた。

本校の隣を流れる「岩戸川」にはホタルの生息地がある。本校から、徒歩で5分の地点である。毎年、5月下旬に地域の方を招いて「ホタル鑑賞会」を実施してきた。鑑賞会の中では、本校の環境学習の発表を行い、環境カウンセラーの小林修先生に講話をしていただき、その後実際に岩戸川のホタルの生息地まで観察しに出かけていた。

4年生では成虫を採取し、卵から飼育を行っている。翌年5月下旬から6月上旬にかけて、5年生教室ではホタル

が誕生しており、夜間教室でホタルが輝く光景が見られる。

昨年も5月下旬、熊本地震の余震が続く中で、5年生教室でホタルが輝いていた。本校職員にとって心が癒やされた瞬間であった。

3. 熊本地震の影響

本校は、平成28年4月14日午後9時26分と16日午前1時25分の二度にわたり、震度7の地震に見舞われた。前震直後から本校は避難所となった。その後も余震が収まらず、車中泊の車が300台、教室での避難が150名という日が続いた。

本校の児童も、軒先避難や車中泊を多数が経験し、中には県外に避難したり、町内外の避難所での生活を余儀なくされた。全員が被災者であり、約3割の児童が現在も自宅に住むことができていない。

また、これまで地域学習の中心として学習してきた「そうめん滝」の堤防が崩れてしまった。そして、水質調査や生き物調査をしてきた「ホタルの生息地」が崖崩れに見舞われた。どちらも児童が近寄れるような状況ではなくなった。とりわけ、余震が続く中、岩が大きく崩落した「ホタルの生息地」は、危険な状況であった。

連休明けの5月9日、本校は再開した。「子どもたちの笑顔で地域を元気に」したいという思いを職員・児童で共有しながら、前年までの教育活動を引き続き行おうと努力してきた。とりわけ、本校児童のあいさつをはじめとした元気な姿を見せたいと努力してきた。

しかし、平成28年度の環境学習では、「そうめん滝」や「ホタルの生息地」に行くことはかなわなかった。

4. 今後の環境学習

平成29年度は、本校の環境学習を再構成しなければならない。「ホタルの生息地」については、崩れた岩の整理が進んでいる。これまでと同じように水質調査等を行えるかどうかは今後の状況次第であるが、地域と協力し岩戸川の整備を進めていきたい。また、「ホタル鑑賞会」の再開をはじめとして本校の環境教育を再スタートさせたいと考えている。



写真1 ホタルの幼虫とカワニナの観察



写真2 熊本地震後のホタルの生息地